

雄城台

第8次発掘調査の概要

1987

大分県教育委員会

例

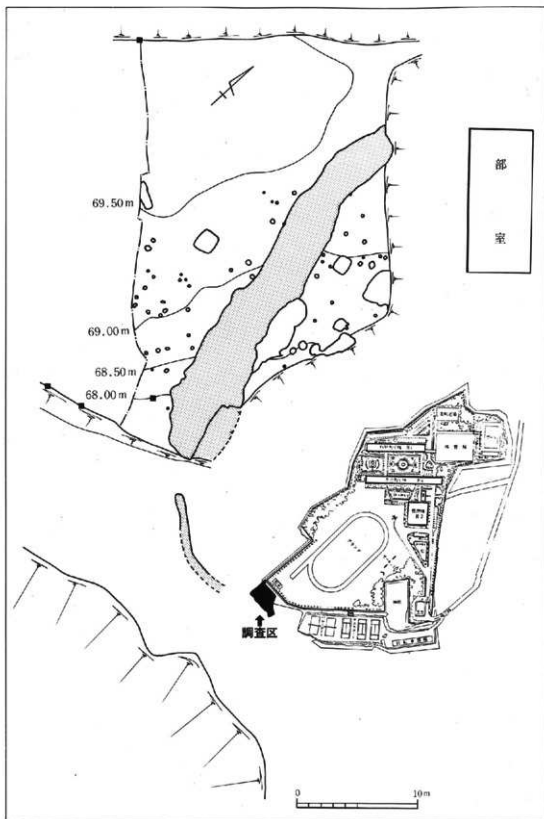
言

1. 本書は昭和61年度に発掘調査を実施した、県立大分雄城台高校運動場拡張工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告である。
2. 発掘調査は大分県教育委員会が実施した。
3. 調査団の構成は次のとおりである。
調査委員 賀川光夫（大分県文化財保護審議会委員・別府大学教授）、小田富士雄（大分県文化財保護審議会委員・北九州市立考古博物館長）、塔鼻勝人（大分県教育庁管理文化部文化課長）
調査員 後藤宗俊（大分県教育庁管理文化部文化財専門員）、清水宗昭（同主査）、高橋信武（同主任）、西哲弘（同主任）
4. 本書の執筆は、Ⅰ－3を清水、その他と編集を高橋が行った。なお石器実測図は榊原俊一（文化課嘱託）による。

目

次

Ⅰ は じ め に	1
1. 調査に至る経過	1
2. 遺跡とその周辺	1
3. これまでの調査	3
Ⅱ 発 掘 調 査	6
Ⅲ ま と め	16



第1図 調査区の位置関係図

I は じ め に

1. 調査に至る経過

昭和61年夏、県立雄城台高校西縁辺に運動施設を拡充するためハンドボールコート造成が計画された。雄城台遺跡の東部ではかつて、校舎建築に先立ち7次にわたって発掘調査が実施され、弥生・古墳時代の集落が検出されているため、この西端部でも遺構の存在が予想された。県教委で昭和61年11月12～19日に試掘調査を行なった結果、弥生時代の遺構を確認し、遺跡が台地の西にのびていることが判明した。

運動施設拡充というやむをえない状況の中で、昭和61年12月2日～昭和62年1月31日まで記録保存の発掘調査を実施した。

発掘調査に当っては、嶋津文雄校長をはじめとする雄城台高校より多大なる協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

2. 遺跡とその周辺

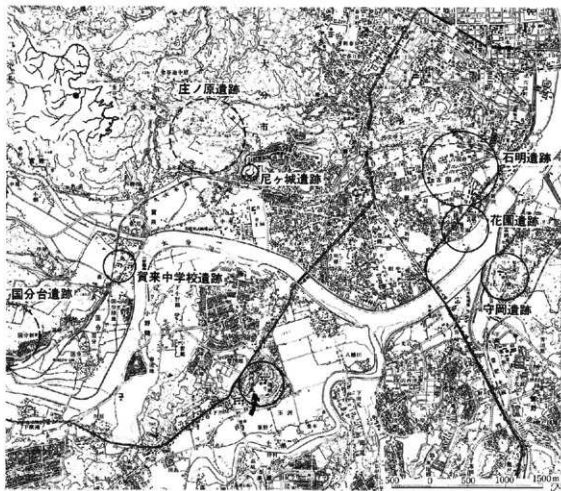
雄城台遺跡は大分市大字玉沢字宮ノ口に所在し、周辺の水田面より53mほど高い標高67m前後の独立丘陵上にある。台地上面の規模は約450m×300mほどで、西南から東北にのびていてその方向にやや傾斜している。調査区の位置する台地西端部が最も高く、標高69m前後である。

台地の基盤は阿蘇溶結凝灰岩よりなり、約7万年前に大分川上流から流下したものである。その上位に火山灰層が堆積しており、この層に各時代の遺構が掘り込まれている。

現在、台地上は県立雄城台高校として利用されているが、中世には城が構えられていたと文献は伝えている。更に古墳時代・弥生時代には居住地として利用されていたことが、これまでの発掘調査によって明らかにされている。また、少数ではあるが後期旧石器時代や縄文時代晩期の遺物も同時に出土しており、今後の調査によっては弥生時代以前の雄城台遺跡のあり方も解明されるものと期待される。

弥生時代に限って周辺遺跡の分布状況を見ると、雄城台遺跡と同じく独立台地上にあるもの(守岡遺跡)、台地上にあるもの(尼ヶ城・庄ノ原・国分台遺跡)、大分川流域の自然堤防上や沖積平野にあるもの(花園・石明・賀米中学校遺跡)などが知られている。

弥生時代の遺跡から中国製の銅鏡が出土することがあるが、北部九州の一部をのぞいては完形ではなく破片の形で所有していたことが明らかにされてきている。しかも、全ての集落から出土するのではないことから、ある程度有力な人物が所有していたらしいと考えられている。大分平野では大分川流域の3遺跡と大野川流域の1遺跡より発見されている。守岡遺跡(中期・後期終末、鏡片2点)、雄城台遺跡(既調査区内。前期・中期・後期、鏡片2点)、尼ヶ城遺跡(後期終末、鏡片1点)、地蔵原遺跡(弥生終末期、鏡片1点)。これらは独立性台地ないし、その傾向の強い台地に立地する点が共



第2図 雄城台遺跡(矢印)と周辺の弥生時代遺跡(点線は未発掘)



雄城台遺跡遠景写真(南から)

通している。時期的にも、低地部の遺跡が後期になって出現するのとは対称的である。

このように低地部の遺跡と独立性台地の遺跡は等質とは言えない面がみられ、特に規模の大きい雄城台遺跡と守岡遺跡は大部分平野における重要な集落であったものと考えられてきた。

3. これまでの調査

雄城台遺跡の調査の契機となったのは県立高校の建設が予定されたため、発掘調査は昭和46年度から行われた。第1次から第7次までの発掘調査は主として高校校舎等の建設予定部分に限定して実施したもので、昭和49年度まで行った。調査地点は、台地の北半部であり、台地の東側に切込む湧水点の小谷に近い位置である。

第1次調査は、昭和46年7月～8月に試掘調査として実施した。当時はまだ県蚕業試験所雄城台桑園となっており、調査の範囲は限定されたものであったが、集落跡の一端を伺うような遺構と遺物を検出している。発掘調査は、小田富士雄氏（現北九州市立考古博物館長）の現地指導を得て行った。調査の結果、弥生時代中期（下城式）の袋状竪穴・土壇墓、後期の方形竪穴住居跡が検出され、土器のほか鉄器・石器が出土している。

第2次調査は翌47年7月に、第1次調査区の北約30mの位置に東西25m、南北6mの範囲で実施した。ここでは同様に中期袋状竪穴及び後期方形竪穴が検出され、遺物では多数の土器のほか、磨製石鏃（製品・未製品）鉄器（鏃・鉋）管玉等が出土している。

第3次調査は同年9月に、第1次・2次の中間の西側の校舎予定地部分約300㎡を発掘した。竪穴住居跡8基のうち1つは円形プランをもち、ここからは炉跡の近くで台石と、その周辺に磨製石鏃の製品・未製品が出土した。このほか石庖丁・土製勾玉・磨製石剣（未製品）が出土している。

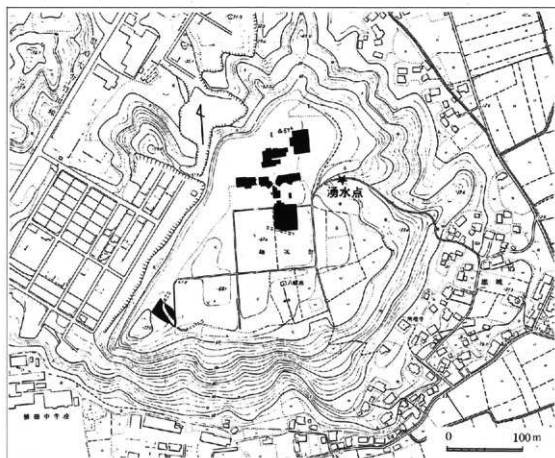


第4次調査は1次調査区の北東50mの体育館予定地部分の約600㎡を発掘した。弥生中期の袋状竪穴7、土壇墓4、後期の竪穴住居跡23基（円形2、他は方形）を検出。遺物は弥生中後期の土器に伴ない、鉄製鎌・磨製石鎌のほか、炭化物（ドングリ類）が出土している。今回でも磨製石鎌の製品・未製品が多く出土しており、また袋状竪穴の多くが焼土をかぶっていることが観察された。

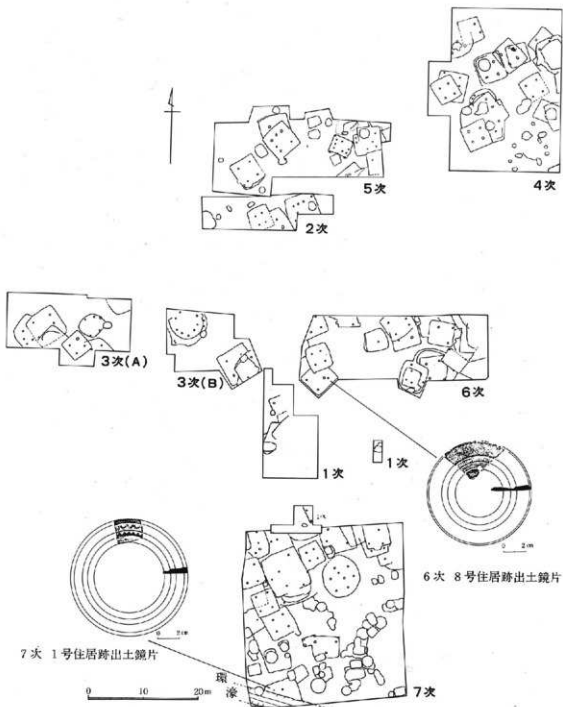
第5次調査は第2次調査のすぐ北側に接して設定し、昭和48年5～6月に実施した。約350㎡の範囲の中で方形竪穴住居跡8基（弥生後期主体）、袋状竪穴3基、土壇5基を検出している。主な遺物は鉄鎌・磨製石鎌・管玉等が出土している。

第6次調査は第3次調査区を東に延長した部分についての450㎡を昭和49年4～5月に実施した。弥生時代の方形竪穴住居跡は前期末1、中期1、後期～終末期17基のほか古墳時代住居跡2基が検出されているが、土壇は少ない。遺物は各時期の土器のほか、住居跡から舶載鏡片（後漢・内行花文鏡）が出土したことは特記されよう。

第7次調査は、1次調査の南側 約900㎡を昭和49年11月～50年2月まで実施した。竪穴住居跡は弥生中期1基のほかは後期～終末期のものが25基と多く、北西半に重複して検出された。



第3図 雄城台遺跡地形図



第4図 雄城台遺跡第1～7次 発掘調査区・遺構配置図 (1971～1975)

袋状竖穴（弥生前期末）と方形土坑（同中期）は調査区の南東半部に集中して検出されている。また、調査南西端部に大形のV字溝がほぼ東西方向で確認されているが、一応この地点が住居跡群の区切りを示すのではないかとみられている。遺物は弥生前・中期の良好な土器セットのほか、舶載鏡片（後漢・方格規矩文系）・銅鏡が出土している。

以上、雄城台遺跡の全体からみればわずかの調査面積であるが、雄城台遺跡が弥生時代全期を通じての大集落跡であることを伺い知ることができる。大分平野では、これに匹敵しうるのは大分川を挟んで対峙する守岡遺跡をあげうるに過ぎない。また舶載鏡片も2点出土しており、これについても守岡遺跡2点のほかは尼ヶ城遺跡(1点)、地藏原遺跡(1点)でしか発見されておらず、同平野部における卓越性を示唆するものとみられる。

II 発掘調査

調査地区は現状では雑木林だったが、北側と南側は開墾のため比高2mほどの削平をうけていた。東側は運動場に隣接しており、ここも比高差2mほどの削平をうけていた。表土は調査区北部で薄く10cm以下、南部で厚く50cm強であった。

今回の発掘調査では、溝状遺構・土坑・小穴などが多く検出された。

溝状遺構は調査区では弧状に検出されたが、当初開墾によって削平されていると考えた南側でも検出され、少なくとも半円形をなすことは確実となった。最大上面幅5.0m、最大深さ1.4mで、北部から中部は幅約1mの底面をもち緩やかに南側へ傾斜しているが、南部の12mほどの底面は狭まり6段に分かれている。



伐採作業



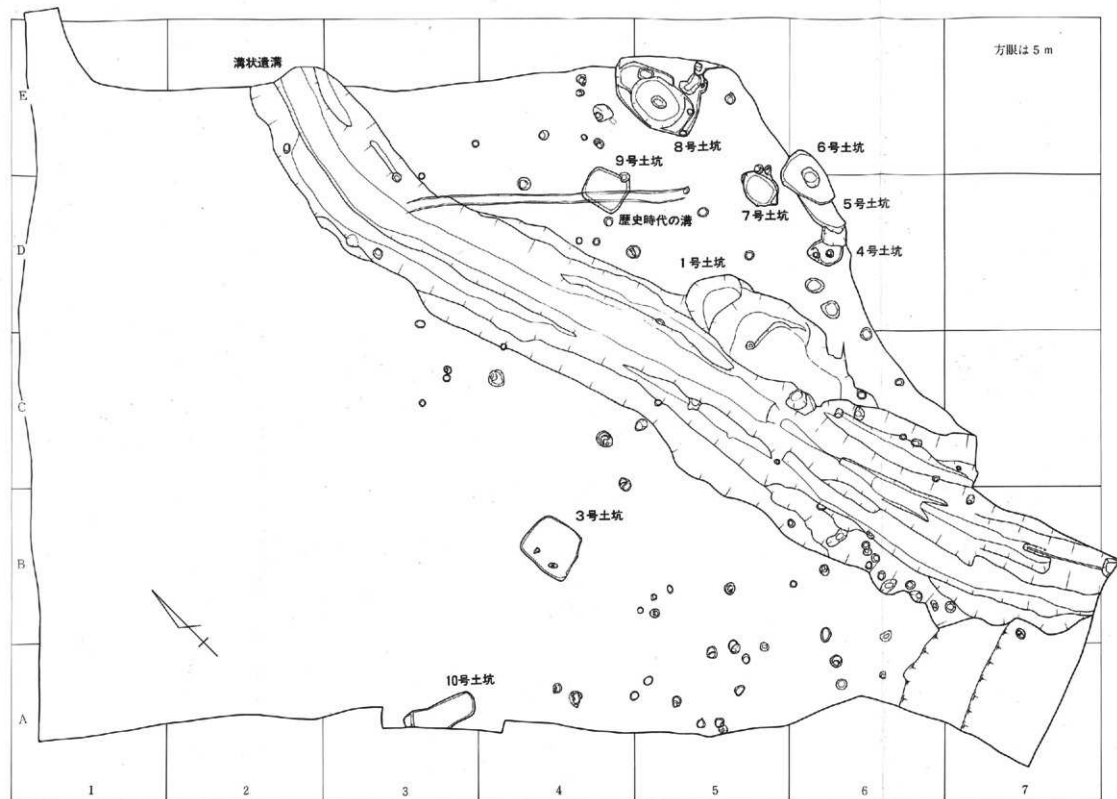
試掘状況



遺構検出



完掘状況



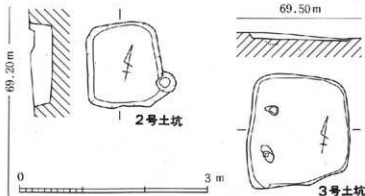
第5図 雄城台遺跡遺構配置図

この遺構からは多量の遺物が出土したが、中でも埋土上部では一括廃棄された状態の完形品を含めた多数の弥生時代後期終末の土器が出土した。埋土下部からは小片が目立ったが、中期に属するものも含まれており、遺構の形成期がその頃にさかのぼる可能性を示している。

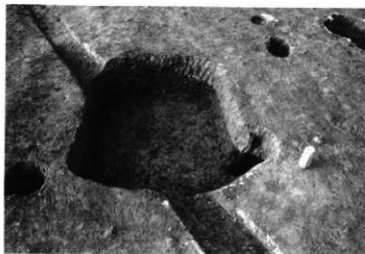
また、埋土中より旧石器が数点出土した。ローム層中に包含層が存在するものと考えられる。

土坑は10基を数えた(1~10号土坑)。そのうち8号としたものは当初住居跡と考えていたが掘り下げの結果2~3基の土坑の重複のようである。なお、土坑の用途は次のように考えられる。貯蔵穴と考えられるもの(4・6・8号土坑)。貯蔵穴の可能性のあるもの(5・7号土坑)。土坑墓の可能性のあるもの(10号土坑)。用途不明のもの(1・3・9号土坑)。

土坑の時期については現在未整理の部分が多く正確には後日に期すこととしたいが、8号土坑からは下城式土器が出土していた。また、7号土坑上部からは中期中葉の土器片が出土しており、貯蔵穴群に限って言えば前期及び中期に用いられたものと思われる。



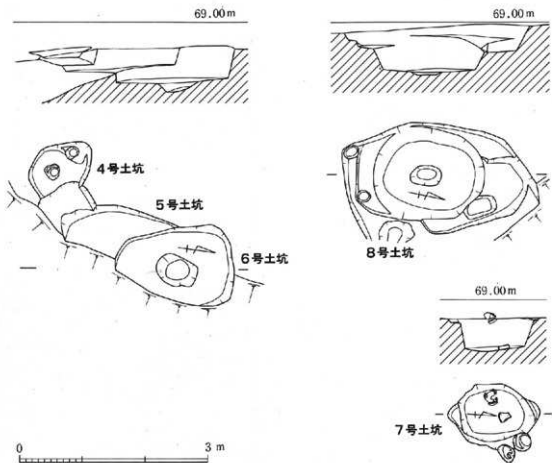
第6図 2号土坑・3号土坑実測図



2号土坑



3号土坑



第7图 4~8号土坑实测图



8号土坑



上写真：調査区南側で溝状遺構のつづきが検出された状況。手前（北部）では削平されているが南部では幅40cmほどで残存する。
開墾によって平地が造成され、台地はより写真上方に拡張している。

右上写真：溝状遺構上部の遺物出土状態。
溝状遺構が半分程度埋まりきった段階（弥生時代後期終末）に70個体以上の土器が投げ捨てられた。おそらく、大部分は完形品だっただろうと思われる。



右中写真：溝状遺構北部の遺物出土状態。
後期終末の遺物は中心線よりやや左（東）側にあり、右（西）側には平底の土器（より古い時期のもの）がみえる。

右下写真：遺物の検出作業状況。





溝北部の遺物出土状況



溝埋土の堆積状況



溝中部の遺物出土状況



完掘後の溝(中～北部)



溝中部の遺物出土状況



完掘後の溝(南部)

遺物説明 (P13～P15, No.1～No.32)

溝状遺構(環溝)の上部より一括して出土した土器群の一部である。1～10は二重口縁の壺形土器である。1～4・7・9・10は口縁部に簡拙波状文をもつ。1(高さ50cm)。3(高さ41cm)。4(高さ18cm)。12～23は煮炊き用の変形土器である。外面にすすが付着している。12(高さ21.5cm)。19(高さ28cm)。23(高さ21cm)。24は赤色塗彩の高環形土器。鉢形土器には各種がある(25～30・32)。32(高さ10cm)。15は穀類を蒸す甑形土器で、底部に1孔をもち、高さは15cmである。



1



3



4



5



8



2



6



9



7



10

壺形土器 (1~10)



11：壺形土器



12



13



14



15



16



17



18



19

11～19：甕形土器



20



21



22



23



24：高环形土器



25



26

25・26：脚付鉢形土器



27

27～30・32：鉢形土器



28



29



30



31：甗形土器(有孔)



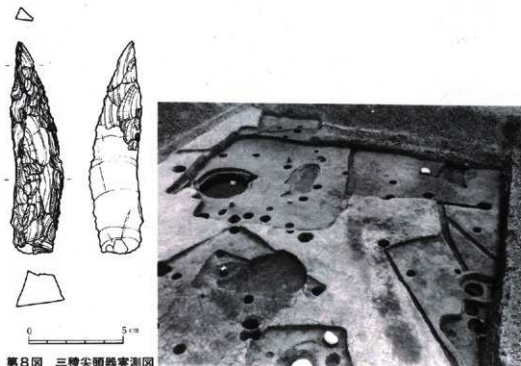
32

Ⅲ ま と め

今回の発掘調査区域は、雄城台丘陵の西端に位置し、また約700㎡の限られた範囲内であったが予想を上回る成果が得られた。環溝をなすと考えられる溝状遺構や貯蔵穴群、土坑墓と考えられるものなどの弥生時代の遺構が検出された。以前にも一部分、溝状遺構が検出されていたが、今回初めて弥生時代の雄城台遺跡は環状にめぐる空掘りによって防御されていたことが明らかになった。これは大分平野における主要集落であった雄城台遺跡の性格を考える上で貴重な発見であるとともに、環溝が廃棄されたのが後期終末頃であった点は興味深い。多量の遺物が環溝に廃棄された原因は大分平野を中心とした在地勢力内部の動向ではなく、あるいはすでに古墳時代の土師器を所有する人々が大分平野の一角に出現し、彼等との関係によって行われたものとも推測できるからである。

旧石器の出土も雄城台遺跡に1ページを加えることとなった。三稜尖頭器は約1.8万年前後に製作された狩猟具であり、当時この台地に人間がいた証拠となるが、包含層を確認し調査する余裕がなかったのは残念であった。

8次に渡る部分的調査によって、旧石器時代以来この台地が生活の舞台として利用されていたことは分った。しかし、それぞれの時期の具体的な様相を述べるには時期尚早である。今後还有机会あるごとに発掘調査を重ね、雄城台遺跡の全容を解き明かしてゆきたい。



第8図 三稜尖頭器実測図

雄 城 台
第8次発掘調査の概要

昭和62年3月31日

発 行 大 分 県 教 育 委 員 会
〒870 大分市府内町3-10-1
☎0975-36-1111(内線4276)
印 刷 日 の 丸 印 刷 株 式 会 社

